＜授業実践６＞「文学国語」書くこと

１　単元名

随筆を読んで優れた表現や叙述の仕方を理解し、感性や心情を豊かにする。

２　指導目標

(1) 単元の目標

・文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めることができる。(〔知識及び技能〕(1)ウ)

・文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫することができる。(〔思考力、判断力、表現力等〕A「書くこと」(1)ウ)

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。(「学びに向かう力、人間性等」)

(2) 言語活動

ア　言語活動

自由に発想したり教材の随筆を参考にしたりして、エッセイを創作する。((2)ア参照)

イ　言語活動のねらい

小学生や中学生の頃に読んだ本を再読し、感じ方や捉え方がどのように変わったのかをグループで話し合わせ、過去に読んだときとは違う感じ方や他者と読み方が違うところなどをエッセイとして表現する。再読やグループでの話し合いなどの体験を通して感じたことを基にした上で、表現方法を工夫し魅力的な文章になるよう心がけさせたい。

(3) 教材

ア　教材　「クレールという女」須賀敦子（『文学国語』東京書籍）

イ　教材観

本教材は、筆者が 40 年前に読んだ『人間のしるし』(クロード・モルガン）を再び読み直し、本の登場人物の人生と筆者の人生を重ね合わせながら、叙情的に描いた随筆である。書物の中の登場人物のそれぞれの生き方や考え方を読み解き 40 年前と現在とで感じ方や捉え方が変化したことが巧みに表現されている。生徒たちにも過去に読んだ作品を再読する機会を与え、時間の経緯の中で読みが変化することを感じさせるのに適した教材である。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

いわゆる「読書感想文」が苦手な生徒は多い。書くことへの抵抗感をなくすために、過去に読んだ本をもう一度読み直して変化に気付かせたり、グループで互いの感想を話し合ったりと、書くための材料を自ら発見できるように進めていった。過去に読んだときの感想がすぐに思い出せなくても、印象に残っている登場人物の台詞は思い出せたり、話し合いの中でグループの仲間の意見に触発されたりしていくうちに、意欲的に課題に取り組めるよう工夫した。

３　観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文学的な文章やそれに関する	「書くこと」において、文体の特	エッセイを創作することを通し

文章の種類や特徴などについて理解を深めている。	徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫している。	て、文体の特徴や修辞の働きなど、表現を粘り強く工夫する中で、自らの学習を調整しようとしている。

(2) 評価方法

ア　知識・技能

ワークシートの記述によって評価する。

イ　思考・判断・表現（書くこと）

ワークシートとエッセイの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
様式に従い、再読によって得た感じ方や捉え方の違いを踏まえ、文体や修辞などの工夫をしながら、エッセイを書く。	過去の読みと現在の読み、あるいは他者の読みと自分の読みを比較した上で、魅力的な文体や修辞などを考慮し、読み手を引き付ける表現を用いて、エッセイを書いている。	過去の読みと現在の読み、あるいは他者の読みと自分の読みを比較した上で、文体や修辞などを考慮し、読み手を引き付ける工夫をしながら、エッセイを書いている。	過去の読みと現在の読み、あるいは他者の読みと自分の読みを比較して、エッセイを書いている。

4　単元の指導計画（配当４時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 ＊生徒への支援の手立て	評価上の留意点 ◇観点　□点検・確認　■分析 ＊「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次（2時間）	・単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ・過去に読んだ書物で現在も印象に残っているものを挙げ、その理由を考える。 ・「クレールという女」を各自で通読し、本文の構成を整理し、その特徴を理解する。	・教材の随筆を読む中で、魅力的な表現に着目し、エッセイ創作に役立てることを理解する。 ・小学校や中学校に読んだ本で印象深い本を自由に挙げさせ。特徴的な登場人物や台詞など、印象に残っている理由を考えさせる。 ・書物の登場人物の関係性を理解しながら、作者がどのように表現しているかに注目させる。 ＊書物の内容を綴る中で、現実世界の風景描写や作者の懐古的描写がどのような効果を生み出しているかを考えさせる。	◇（知） □「記述の点検」（ノート、ロイロノート・スクール(株式会社 LoiLo、以下ロイロノートと表記) ＊随想というジャンルの文章がどのようなものかを理解させる。
	・『人間のしるし』の登場	・『人間のしるし』が筆者たちを	◇（知）

	人物のそれぞれの生き方・考え方をワークシートを使ってまとめる。 ・四十年前、筆者たちは『人間のしるし』を通して自分たちの生き方をどのように考えていたかを読み取り、ワークシートⅠに記入する。	とりこにした理由を読み取らせる。 ・四十年前の筆者たちが「人間らしく生きる」とはどのようなことだと考えていたかを考えさせる。 ＊四十年前の筆者たちが、自分たちの問題意識をどう捉えていたかを確認させる。	□「記述の確認」（ワークシートⅠ） ＊「四十年前の私たち」と現在の「私」とでは、登場人物に対する考え方が変わっていることに気付かせる。 ＊「私」と「仲間」たち、それぞれの視点から登場人物について確認させる。 ＊他の生徒と相談させながら、ワークシートⅠを完成させる。
第2次（1時間）	・四十年後の筆者が『人間のしるし』から何を感じているかを読み取る。 ・小学校や中学校に読んだ教材を再読し、感じ方や捉え方がどのように変わったのかをグループで話し合う。 ・当時と現在の読みの違いをワークシートⅡに整理し記入する。	・四十年後の筆者が登場人物の生き方をどう捉え直したかを確認させる。 ＊四十年後の筆者が『人間のしるし』を読んで、登場人物に対する見方が変化していることに注目させる。 ・準備した複数の教材をグループ内で通読し、当時と現在の感じ方や捉え方の違いを自由に話し合わせる。 ＊作品を読んだ印象ばかりに偏らず、経験や価値観の変化に伴い、新たな気付きがあるかを話し合うように注意する。	◇（思） □「記述の確認」（ワークシートⅡ） ＊グループ内の他の生徒と相談させながら、ワークシートⅡを完成させる。 ＊回収したワークシートⅡの記述が不十分なものについては、再度説明したり、詳細なコメントを書いたりする。
第3次（1時間）	・自分の読書体験に基づいて本文に倣い、エッセイを書く。 ・必要応じて他の生徒に読んでもらい、表現の仕方を工夫する。	・過去の読みと現在の読みの違いを明確にさせ、それが伝わるように表現方法を工夫する。 ＊完成した者は、自分が感じたことが伝わる文章かどうかを見直すよう指示する。	◇（思） ◇（態） ■「記述の分析」（随筆） ＊新たな気付きが見つけられない場合は、より強く印象に残った部分について書くよう指導する。

５　本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

教材を踏まえ、過去に読んだ作品を読み直すことによって、感想や考え方が変化していることに気付き、随筆を書くことができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

様式に従い、過去の読みと現在の読みを比較しながら、文体や修辞などが工夫されて書かれている。

(3) 本時（４時／４時間）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入（５分）	・本時の学習内容を知る。	①本時の目標と言語活動について確認する。	①過去の教材を再読して感じ方や捉え方の変化を随筆として書くことを理解する。
展開（40分）	・自分の読書体験に基づいてエッセイを書く。	②「過去の読み」と「現在の読み」を比較し、違いが分かるように書く。 ③読み手を引きつける文章になるよう、表現方法を工夫する。 ④必要に応じて他の生徒に読んでもらい推敲する。	②ワークシートⅡを活用し、過去と現在の感じ方や捉え方がどのように変わったかを確認させる。 ③読み手に分かりやすく伝えるだけでなく、魅力的な表現になるよう意識させる。 ④他者の助言を踏まえ、自分の文章の特徴や課題を見つけさせる。
終結（５分）	・本時の内容を振り返る。 ・次時の内容を知る。	⑤自分が工夫した表現にはアンダーラインを引く。 ⑥リフレクションカードを記入する。	⑤文体や修辞など、書く際に工夫した部分に線を引くことで意識させる。 ⑥本時の目標に即した活動ができたか、またその達成度について、振り返ってロイロノートに入力させる。 ■随筆を回収し、ルーブリックを用いて「記述の分析」により評価する。

６　研究の実際と考察

(1) グループワーク

再読する作品を小学校、中学校の教科書で読んだものとし、事前の授業で生徒にどの作品をもう一度読んでみたいかを尋ねた。意見の多かった作品を中心に、以下のものを準備した。

・「ちいちゃんのかげおくり」あまんきみこ（小３）
・「やまなし」宮沢賢治（小６）
・「少年の日の思い出」ヘルマンヘッセ（中１）
・「盆土産」三浦哲郎（中２）
・「握手」井上ひさし（中３）

５～６人一組とし、各グループに５作品を入れた封筒を配付した。回し読みを指せた上で、どの作品について話し合うかを選ぶよう指示した。すぐに決まらないグループについては、複数の作品で話し合ってもよいことにした。また、選んだ作品によっては別のグループとのメンバーの入れ替えも可とした。話し合いを進めていく上では、過去に読んだときの感想や印象をなかなか思い出せない、話せない者もいた。そのため、もういちど読んでみたいと思った理由を糸口に、登場人物の印象深い台

詞や当時の授業のこと、また共感したり、似たようなことを経験したりしなかったかなど、話し合いを進める上でのポイントを補足説明した。クラスによっては外国籍の生徒が在籍し、中学生時代にどの作品も読んでいない者もいたが、その場合は自分と他人との感想の違いを書くよう指示した。始めは意見の言えなかった生徒も、他のメンバーの意見に触発される形で意見が述べられるような姿も見られた。どのグループも活発な活動が行われ、順調に進めることができた。

(2) エッセイ創作

教材に倣って、書き出し文、転換文、結末文の書式を設定し、その形に添ってエッセイを書くように指示した。多くの生徒は、エッセイはもちろん自由に意見や感想を書くことを苦手とする者が多いため、今回のように書式をあらかじめ設定しておいたのは、有効であった。また、自分一人ではなかなか書くことが見いだせなかったり、意見がまとまらなかったりすることについても、グループワークを通して、他人の意見を引用する形で文章を書き進めることができていたように感じる。エッセイを書く時間も、生徒の要望が多かったのでグループでの座席のままとし、お互いに意見を交換したり、見せ合ったりしながら作業を進めていった。作品のあらすじは最小限とし、自分や他の意見を参考にしながら書くようにも指示した。50 分の授業内で提出できた者は約７割であったため、未完成の者は期日を設けて提出するように促した。提出については、手書きでも文書作成ソフトを活用したものでも可能としたが、９割以上の生徒が手書きで作品を完成させて提出した。

７　研究の成果と課題

過去に読んだ作品をもう一度読み直すという活動は、作品自体の感想だけでなく、読んだ当時の生活も同時に思い起こされ、グループでの話し合いは予想した以上にどのグループも盛り上がった。話し合いの中で、懐かしさと新鮮さの二つを感じることができ、エッセイの創作意欲へのつなげることができたように感じる。

しかし、実際にエッセイを書き始めると、なかなか筆が進まず、想定していたよりも時間がかかっていたようだった。単元末に実施した授業に関するアンケートでは、ワークシートの活用やグループワークといった方法は、おおむね良好で効果があったと感じることができた。生徒の自己評価では、過去と現在の読みを比べることで精いっぱいとなり、表現を工夫するところまでに至っていないと判断した生徒が多かった。表現を工夫したり、文章を推敲したりするまでの時間が足りなかったようである。それでも、教材で使用されている修辞法を進んで取り入れてみたり、独自の個性的な感性をもって文章を書いていたりと工夫が見られた作品については評価Ａとした。評価Ａの生徒は、全体で 10％未満、評価Ｂは約 80％、評価Ｃは 10％未満であった。実践授業では書いた作品をそのまま提出させたが、提出の際に自らが工夫した表現についてはアンダーラインを引かせるなど、生徒自身の意図を読み取りやすくする工夫をするとよかった。実際の授業では、教材の理解を深める活動が中心となる計画だったため、「４単元の指導計画」については、「書くこと」を軸としたものに書き改めた。